

強者の戦略

こんにちは。日本史の岡上です。各地で大雨が降ったかと思いきや、今度は突然の猛暑。しかし、暑さに負けてばかりはいられません。受験生にとっても、予備校講師にとっても (!?) 夏はまさに決戦の時期と言えるでしょう。気合いを入れて、いい夏にしていきたいものですね。

さて、みなさん、1週間ほど時間がありました、どのような解答が仕上がったのでしょうか？今回取り上げた東大日本史の第2問は中世からの出題で年貢品目の変化や商品流通に関して考えさせる問題でした。所謂、社会経済史の分野になりますが、東大の過去の出題としては以下のようなものがありました。(下記参照)。

2004年 [2] 中世・近世前期の貨幣流通

1995年 [2] 中世後期の商業・貨幣流通

このような社会や経済に関するテーマは、ひょっとすると多くの受験生にとって、つまらなく感じてしまうところなのかもしれません。また「年貢」、「代銭納」、「商品経済」など言葉としては頭に入っている、実際にどういうものであったのか、なかなかイメージがつかないのかもしれないですね。しかし、今回の問題はそんな受験生に対し、荘園・公領の年貢に関する資料や、東寺に収蔵されている史料などを活用させることで、中世の社会経済史を考えさせる格好の問題であったように思います。

今回は、出題の問題に沿いながら「**中世の社会経済史**」の一端をみていきたいと思えます。社会経済史は一見地味な分野かもしれませんが、その時代に生きた人々の動向をダイナミックに理解できる分野でもあります。その面白さが少しでも伝わればと思います。

<中世の社会経済史>

(1) 中世の荘園・公領の年貢

問題にある(1)の表は平安末～鎌倉時代における荘園・公領の年貢がどのような物品で納められていたのかを地域ごとにまとめたものです。ちなみに問題文にも注釈がありますが、この表は網野善彦氏の『日本中世の百姓と職能民』(平凡社、2003)に収録されているものです。

網野善彦氏は日本中世史に多大な影響を与えた学者ですので、東大の日本史受験を考えているみなさんであれば、一度は氏の著作に触れてみることをお勧めします。ちょうど夏休みですしね。

さて、話を戻しましょう。(1)の表から読み取れることは何でしょうか？

畿内

国名	米	油	絹	麻	綿
山城	17	6		1	
大和	27	7	2		
河内	8	1			
和泉	2	1	1		1
摂津	13	2		1	

畿内の特徴ですが、一目見て「米」が多いことに気付きます。それから注目すべきは特に山城・大和において「油」が見られることでしょうか。「山崎」「油」とくれば思い出されるのは、「大山崎油座」ですね。「大山崎油座」は京都近郊の大山崎にあって、石清水八幡宮を本所とする荏胡麻(灯油)の座で、西国で原料を仕入れ、畿内東国10カ国での販売独占権を持つ大規模な座でした。つまり、この時期には商品作物の栽培が行われ、それが年貢としても収納されていることがわかります。

強者の戦略

関東地方

国名	米	油	絹	麻	綿
相模				3	
武蔵			2	2	
上総	1	1		4	3
下総			1	1	1
常陸		1	5	1	2
上野				1	
下野			3	2	

関東地方においては畿内と異なり、「麻・絹・綿」といった繊維が多い傾向があります。畿内で多かった「米」は上総に若干見られる程度で、ほぼないと言った方がいいかもしれませんね。

九州地方

国名	米	油	絹	麻	綿
筑前	13				
筑後	6		3		1
豊前	1				
豊後	3				
肥前	4				
肥後	7		4		
日向	1				
大隅	1				
薩摩	3				

最後に九州地方では、畿内同様米が多いことがわかります。筑後や肥後においては「絹」もみられますが、九州全体で考えると割合としてはかなり少ないものになります。

このように(1)の表からは**荘園・公領の年貢が各地域・国ごとに一定の傾向を持っていた**ことがうかがえます。「年貢＝米」と思い込んでいる人にとっては、少し意外な感じがするかもしれません。

では何故、各地域・国ごとに荘園・公領の年貢の内容に差異がでるようになったのでしょうか？

まず背景として(1)の表に示されている平安末～鎌倉時代にかけて、中央集権的な律令体制が崩壊し、荘園・公領制という、ある意味で地域性のある体制に変化していったことがあると考えられます。

また、その他の条件としては**年貢の輸送コストの問題**が考えられます。西日本に「米」が多く、一方東日本に「絹・麻・綿」などの繊維が多いことは、そのまま当時の輸送経路の状況を反映しているとも考えられます。つまり、当時すでに廻船などが発達していた西日本においては、重く陸路での輸送コストのかかる米が海路によって運ばれ、海路の輸送経路が未発達であった関東においては、軽く陸路での輸送コストを抑えられる繊維が年貢として採用されたと考えることができます。

以上、各地域・国ごとの荘園・公領の年貢の差異をみてきましたが、一方で全体的な視野でみると圧倒的多数を占めていたのはやはり「米」「絹・麻・綿」です。これらは古代以来、**貨幣機能を持っていた物**で、「皇朝十二銭」の流通途絶後は中央においても**貨幣として使用されていた物**でした。つまり、この時期の「米」「絹・麻・綿」の生産は消費財として生産されると同時に、貨幣そのものの生産としての性格もあわせ持っていたと考えられます。

強者の戦略

(2) 代銭納とは何か

さて、問題を進めながらさらに中世の社会経済史をみていきましょう。(2)の史料は、「1290年に若狭国太良荘から荘園領主である京都の東寺に納められた年貢の送り状」とのことですが、この史料からは何が読み取れたのでしょうか？

進上する太良御庄御年貢代銭の送文の事

合わせて十五貫文てへり(注)。但し百文別に一斗一升の定め。

右、運上するところ^{くだん ごと}の如し。

正応三年九月二十五日 公文(花押)
御使(花押)

(注) 合計15貫文の意。

史料の1行目に「年貢代銭」とありますので、すぐに「年貢の代銭納」についての史料であることはわかりますね。ここで考えておきたいことは、(1)の表でみたように**地域の特色に応じた「現物」による年貢納入が、何故この時期に「代銭納」されるようになっていったのか**ということです。

まず「代銭納」については『日本史B用語集』(山川出版社)で以下のように説明されています。

年貢は現物の米で納めるのが本来の形であるが、貨幣経済の進展に伴い、米を銭で納めることも広まっていった。鎌倉時代に遠隔地荘園から始まって、代銭納とも呼ばれた。

要するに貨幣経済の進展が代銭納の原因であるという説明ですが、少し漠然としているような感じがありますね。そこで代銭納の原因について、もう少し掘り下げて考えてみると、対外的な原因が浮かんできます。それは、**この時期に中国から大量の銅銭がもたらされたことが、代銭納が普及する原因にな**

ったのではないかということです。特に年貢の代銭納が進行した13世紀末は中国において南宋が滅亡し、中国全土を支配した元朝が交鈔という紙幣を基本貨幣としたため、中国での用途を失った銅銭が大量に日本に流れ込んだ時期でもあったからです。

しかし、これだけでは説明不十分ですね。やはり中国の貨幣である銅銭が何故、今まで使用されていた「米」「絹・麻・綿」に代わって使用されるようになったのか、その原因を明確に知る必要がありますが、それは二つ考えられます。

まず一つには、**銅銭のもつ計数性能の高さ**にあるといえるでしょう。米の場合だと取引のたびに計量を必要とする上に、地域によって使用される斛が異なるという事情があり(太閤検地で秀吉が地域ごとの斛を「京斛」に統一したことを思い出してください)、非常に煩雑なことになります。それに比べ、銅銭は計量の必要もなく、価値もある程度安定します。

もう一つには、これは案外見落としがちなのですが、その**輸送性能の高さ**にあると考えられます。当たり前ですが、米と同価値の銭を運ぶ際の輸送コストは、銭の方がはるかに低く抑えることができますよね。

以上のように、**13世紀末には対外情勢と銅銭のもつ性質が相まって、積極的に日本での銅銭使用が行われていった**と考えられるわけです。

強者の戦略

(3) 「商品」の発生

年貢の代銭納の成立が社会経済に与えた影響としては、商品市場の拡大を考えることができます。つまり、それまでは年貢として運ばれていた「米」「絹・麻・綿」「油」などの現物が、今度は「商品」として京都に運び込まれていくことになったのです。その状況を示唆しているのが、資料(3)になります。

(3) 摂津国兵庫北関の関銭台帳である『兵庫北関入船納帳』には、1445年の約1年間に同関を通過した、塩10万600余石、材木3万7000余石、米2万4000余石をはじめとする莫大な物資が記録されているが、そのほとんどは商品として運ばれたものであった。

この資料を読み解く上で重要なのは、「莫大な物資」の「そのほとんどが商品」として「摂津国兵庫北関」に運ばれてきたという点です。つまり京都にほど近い「摂津国兵庫北関」(もと大輪田泊)に対し、おそらくは九州・中国地方から「商品」が送られてきた状況があったのです。

このようにみえてくると、**年貢の代銭納の広がり**は、**荘園・公領の年貢を地方において換金する必要性を生じさせる一方で、京都などの消費地に対しては、その需要に応じるために、かつての年貢物が「商品」として流通する社会経済の仕組みを構築していったことがわかってきます**。例えば、かつては荘園から徴収した年貢の保管・輸送にあたった総合的運送業者である問丸が商品の扱いをはじめ、遠隔地間での商品流通を活発化させていく中で、商品の卸売りを業務とする問屋へと発展していくことも、そのひとつといえるでしょう。

<問題の解答解説>

以上、年貢品目の変化や、年貢の代銭納といった状況を通じて、中世における商品流通の発展をみてきました。ばらばらになっていた用語が少しはつながりをもって理解できたのではないのでしょうか？

さて、最後に解答の作成を行いたいと思います。

〔設問A〕

問われているのは畿内・関東・九州地方の年貢品目における地域的特色です。表の(1)の読み取りは上記においてしましたので、あとはそれぞれを対比してとらえれば大丈夫でしょう。

【解答例】設問A

西国は米の割合が高く、関東では麻や養蚕による絹と綿が中心であった。畿内の荏胡麻油の納入からは商品作物の栽培がうかがえる。(60字)

〔設問B〕

問われているのは鎌倉時代後期における年貢品目の変化ですが、これも史料の読み取りから「代銭納」を答えればよいことは容易にわかりますね。ただし、「変化」を問われているので「何」が「代銭納」化したのかは明確に示すように！

【解答例】設問B

地域的特色に応じた現物の年貢から銭貨の納入が一般化した。(29字)

〔設問C〕

問われているのは室町時代に大量の商品が発生した理由ですが、(1)(2)の内容をふまえるという条件がついています。(1)と(2)は対比として考えたいところですので、以下のようにまとめます。

強者の戦略

- (1) 平安末～鎌倉時代にかけて、地域の特色に応じた現物が年貢として京都に輸送された
- (2) 鎌倉時代の後期には、年貢の代銭納が一般化し、京都に銭貨が輸送された

このようにまとめると(1)(2)からは、年貢として納入されていた現物が、年貢の代銭納を行うために地方で換金されていった状況が推察されます。そして既に触れたように、このような年貢の代銭納の広がりが、京都などの消費地の需要に応じるために従来の現物での年貢が「商品」として流通する社会経済の仕組みを構築していったのであると考えることができます。

【解答例】設問C

年貢の代銭納の広がりにより、従来の現物での年貢が地方で換金され、大消費地である京都などへ商品として輸送されたから。(57字)

さて、いつものように論述問題の解答はもちろん一つではありません。「これはどうだろうか?」「これではだめなのか?」と自分では判断がつかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。

それでは次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに!!

<参考文献>

網野善彦『日本中世の百姓と職能民』(平凡社、1998)
桜井英治・中西聡 編『新体系日本史 12 流通経済史』(山川出版社、2002)